佐清一義集

三

俳諧一葉集附合之部二

古學庵佛号
幻窓　湖中　編
坎窩　久臧　校

貞享元甲子冬

荘旬本枯の冬ハ竹宮ヶ似たる一ツれ　菊
たそやとばしる笠れ山茶花　野水
其明の主水平衡屋似らをさ　荷号
可しらは露をふまふ赤　寸　重五
釣解のかなうすゝきの自ひあれ　杜國
白のちゝ　平沙平米を　芍　正平

ウ

赤鹿ハ湯ニ[illegible]ニ
髪をやす[illegible]志のふ為の[illegible]
偽れつくしと乳を志ありすを
消ぬ卒都婆ニすこしと泣
かけ[illegible]は曉さふく火を焚て
[illegible]ハ[illegible]
田中なる小まんの根[illegible]
青ニ舟ひく人ハちんと
たゞの[illegible]を横ニ[illegible]
味さうしき町ニ[illegible]
二の尼ニ近情の花の[illegible]
塚ハ[illegible]

水 翁 五 号 翁 玉 号 水 玉 五 水 翁

二

のり[illegible]
今[illegible]みの矢をさ[illegible]
ぬす人は記念の[illegible]
志は家[illegible]の名を付し
笠ぬ[illegible]
[illegible]
志[illegible]と碎しハ人の骨[illegible]
鳥賊ハ夷は[illegible]
あ[illegible]
秋水一斗[illegible]
日東の李白[illegible]
中ニ[illegible]

五 号 翁 玉 号 水 玉 五 水 翁 五 号

うしの絵帋ふ草の多ら絵千　翁
箕干鮫れ魚をいしゝき　玉
手折明るさの星としむへく　芳
くるそいもとのまゆうまゆ　水
殘ひとへ居湯に春賀の花濂て　玉
廊こいハ蔵れうけ法しふし　五

かるへとも壮手以来こ衣をふるたれ　野水
紗雪れてしも稔まて悩る
露すまさ尺る鶏の浮の食　杜國
此菊まて着る蝶の羽折字　翁
うつらふけれと生ひ出す　荷芳

庭花ら月鶏鞍を明まらむ　重五
桃志を手折負流の富　正平
雨こゆる湯魚の田螺あり植て　玉
れくのきさし紀を只法千ふく　水
床文て評桃ハいとこなる男　芳
孫さまらけのこしみ残りし　翁
口をしと痛をちきる力なれ　水
明るれかるまゆ首おそりきん　五
小三ちすさのつきとしを一ツさむ　翁
月を蓮うれ牡丹ぬす人　玉
縄安みのかゝりハ破れ襲蔵て　五
こゝりしとのみ地蔵きる町　芳

[illegible]

初春の春とや嫁は此の先しく　玉
秀以くらは春そかなゆき　水
二 楢葉に餅すゆる望洋のうゑる　芳
うらひす起よ残留ともして　翁
篠深く楢を椎の葉さひし　水
三孫一可しん不破の再人　五
芝すつ美濃さ赤ひる碁を忘る　翁
秋さ先しはさてを七十　玉
春加めす法書る重ね荷ひ　五
ひとりの傘のいくそりさす　芳
蓮池に鶯の子あふ夕まゐ桃　玉
貴りまつうら荷桃を　濂　水

有りたてる良猫の髪の毒のれて　芳
忘きぬ碓臨滴を　まつ川　翁
二 秋燈は露りあきく都さハ　水
最の寒つるふ雨ちれ里　五
秋より祝をひらき山可けす　翁
ひとりハ典仕の鳥の内仕可　玉
三ヶのを鶯野尾長は多軍　五
しらみいまむ越の猶活苅　芳

杖をひらきまつ川の子十歩　杜國
清みうひる月より花す霽水
水みゆくもはいまつ月　重五

昔原の紫を初物人の矢ゝ萩ひて　野水
小の御門を朴しつけの裏　翁
ち叢撰ひ小ぶまり御のおうすみ　荷兮
葉の湯若をしむ神をのたんぢ　正平
ウ　らしけり物のむ娘のしつまて　五
燈籠ふしけり情しらふ添　玉
秋萩の角力ちのしをえしされ　翁
萬夏さへ春しし浴賀来の坊　水
約月歌双云あれ敵ひして　玉
和を買ひ笑ひ俗ときけきく　兮
見ふ日の業とて雛を作り居る　水
扇婦の果より米なんと云す　五

籬まで洋浪の名を崩れけ　兮
佛　咲しらの魚ほとおかり　翁
縣ふる也見二郎と俗のれて　五
五郎すら能のさしけ六反　玉
二　ら能しける嘲る雲雀ちらしと　翁
古屋の事を和ふるの涙も　水
罠蜂や名刹の橋の長お北　玉
庭原の松をよみておとりぬ　兮
松し子ハ柴苅しけるのひつるん　水
三十ゆを宝く力うる年　五
宝の粧呉玉の笠跡しき　兮
襟を宝能ゝ片袖をとく　翁

ゆゑ人と行を按手欲ほさん　五
けしのひとくさ名をこれす　臣
三ヶ月の東そくらく雖の寄　翁
秋湖逃す野うくす　水
宮をゆるして湖角を放きる　臣
あらよれ念佛藪を隔る　号
新くまれ行燈けしに起使て　水
柳もひうしつも秋の本引　五
そのれ蘇王しひ此の蔭す入　号
世雲此はを系も整かして　翁

難波津すゆし火たくなる

すゝけられと

蔵く里の柳のう妻こう遊のらぬ　重五
人の難ひを鏡　麿　宮　蓬号
花蘇る骨の雲す吹うへす　杜國
野ひ見る皇此月うすりし　野水
風吹ぬ秋のは籠す涵まれは　翁
萩織笠を市に振する　羽笠
加茂川や故麻る代祭激をみ　号
いそうらの聟をつくしの法　五
思ふこと布搗ふ寄す吹れて　水
うれそ二十をこゆる三平　臣
拾ふ是てうらの都れる　笠

火星ぬ火焼ふる人をアルハ　翁
門さまの翁ハ残石可りて翁る　五
血刀ゆくすゆ月のうしろ相手　兮
秀下さ本郷の鐘七ツ　少　玉
冬まつ納豆たくふくし　水
花ハ浅桜の懲と拵ける　翁
僧ものいはす歎ふをのむ　笠
二白蓋渇しぬ手羽を洗ひ　兮
宣旨可しこく釵を縛る　五
八十年を三ツ尺る童母持て　水
あのしろ笑むる七夕の妻　玉
両面ハ桂の花のつれむ時　笠

葉ハ油ト木うつ枕と　翁
眸の家る洗ふる女尺て鳴る　五
羽瓶ハ栗を洗ふ口の管　兮
流れ来て捉ふかさる正月に　玉
つゝみる向る弁菱の宝　水
水の日ハ息を殺浴の象起て　翁
雲かゝはしき南京の地　笠
三ツ口のおしを詰ともしらぬ人の像　兮
泥ハうちの清き芹の根　五
粥する晩を行ハ可しこゝり　水
精石の口ハ謹ふ春風　翁
水の方ふくし篇枕しやのて　笠

秋ふまぬ男をせむる村雨　玉

田家脱室

家自や鄰のつくし並ひ居て　荷号

夜の物ゝ所あれなりけり　翁

楔檜山家の佛殿本紫陣　重五

ひにする牛の境に浮れつゝ　杜國

音もなふ具足に身のさまじと　羽笠

酌とる童業まりにいて　野水

秋の須旅の佛達哥いとのうに　翁

やしやくそれて不二尺ゆる寺　号

寐として桂の花の落る方　玉

藻そ氣遊をそむる風の名　五

鯉抱ひて志ほしの女五三十　水

庭子本首能るしひの落衣　笠

夜深に山楊に楔尺む　号

麻すりしらふ哥の屋所世　翁

江を近く狗糸庭とせる桂で　五

糸自ゝよ身ハ鯉なる　玉

旅衣簡子荷花をおもひ　笠

籠裏ゆるす本瓜の山宮　水

二骨を尺て坐す涙をみおもひ　翁

乞食の簑をもしふ志のしあ　号

泥のよそ尾を曳鯉を拾ひえて　玉

同年臘月十九日　菊

海蒼き野の奉り洋のうま白し
串に鯨を向ふる　鶴　桐葉
二百年系此山を斧取て　東藤
櫻の種まく秋を来りけり　工山
入月を影はるのまこれ出　紫
聲なるお玉を寄おもれ泡く　菊
ツ海雨を志らる母のあるとと　山
一輪咲しし芍薬の　量　蔵
棋の工丈二ヶとちる目を明て　菊
周年明ると狐なくなり　紫
霊芝深る河原をとる蒼の里　蔵

二

葬春をけしる松の入口　山
笠なるく石の砂礫つる里居る　紫
秋の鳥の人　冷千泡く　菊
をとつひの聖分の濱ハ月泡て　山
旁れ雲千話をいふ　蔵
むくもる石の扉を拓しけるき　紫
美人のかうち　おむ　物　山
二 城夷の聲　聖　聲を傳て　菊
生海角なまうも　袖ハぬれけり　蔵
木間より雨千泡雲の聲志ふく　山
藪千屑　屑の十をうり大泡　菊
おつしと炮碌化る祖父ひとり　蔵

京千為家し痛のましまひ　紫
不二の根と呈先て寄すのりあのら　翁
窟に油く鄭のひとり飛ら　山
まつ萬を鏡を見ひらす粧ひ　紫
衣うつく小姓荊の戸を　押　蔵
月飼くみ針のひらき八ッ明て　山
根いそくきえ　家　翁
ニテ破れる具足を雨す節りける　蔵
言葉の縣千えらけ仰りて　紫
紅波の鳥鉄千花の鳥を絞り　翁
ちひさき室の永むるの　伽　山
東西の新蔵宿ひ本　て　紫

まて学ちらす蔵の撮　打　蔵

雷枝
尚まのしきむ西けるしは秋のゝ絶
芝蓮とこしふ風のやも笠　翁

膳延
花の頃ゆるのら学ぬ翁の面
秋千志ゆるし蝶のくりをれ　翁

浴山
河の横むりし拾ひむ本紫の風

すゝきり雲は難四十一　翁

雲をむ旅ひ[illegible]坂帳を見をゆ　如行
古人のやしれ根の本のうし　翁

翁美濃行くすこしんとおもふれハ
檜笠雲をいのちのやとり　桐葉
稱一つうゐ足清みゆく　翁

志のふさく拓て鮮のふやとりのれ　翁

志りひふしたる相源大相　桐葉

雲をさく後る雲れ何しこと翁　翁
本紫り炭を吹おこの鉢　閑水
はたしと株織者れ名のり本を　東藤
手のよろはと伯母のせはしき　桐葉

此海り学難拓ん笠しられ　翁
むくもなひしき波のから蟾　桐葉
木枯り殉る冬広のふら付て　東藤

まさしく千垣に何詠さ中ら　叩端
詞うさも新たとうすら月の出　如行
蓋さくハ寄すし志久る船　笠　工山

能舞と千積りかゝる能の蓑の雪　木因
花のつれとて風も絶あり　翁

貞享二乙丑季
三月廿七日
何とそ所しに何中ら御の堂針　翁

鶴笠　蓑を　姓　伊　居る　叩端
田螺なる蛛の童の所をこのす　桐葉
公　泰平　居のすゝ　外　此中　笠　翁
月を立る雲の親桐の云狗すけて　端
海のむ姨の此のうすさひしき　葉
ウ　双六のうしみを文千古つくし　翁
髮　爪をしむ　神のうつり　垂　端
髮　松ゆす　詩詞の娘　花とくさ　葉
地の雲の何らし　妓王ちの証　翁
[illegible]　端
蓑　老をとむる　明　月の　屏　葉
松もしろの遊女の秋の頼すうや　翁

煙火風を志のふ紅粉四　場
川漱ゆく鬢を角に結てけて　柴
白利とる瀧を紛はしつゝふ　翁
かしこまる石の湯坐の花久し　場
二羽折千湯をうくる　榎や　柴
高よみて如り春おとりかり　翁
枕屏風の絵を繰て　深くみ　場
小あ枕し菊のいろえの遠さり　柴
三段の舟深川の枕　翁
鹿信やひとり杜律を味ひて　場
花うすうなる竹こまの葉表　柴
いのこ峰鶴ハ吹矢を拂ひ来ると　翁

水汲ふ信袖ひゆるうす　場
月明て歩板ふを屋ふらん　柴
雲ハ花空の絵うくむかり　翁
村雨のそしき粉ふるまの当　場
ひとり川兎の瓜喰ふ枕と　柴
二笠尺ゆる人ハ蘿にとちらせて　翁
男やも夫の志を却しき　場
風くらき大事の枕の七ツ中　柴
湖門を抜く生鯉の巻　翁
学磐山学磐を助か花喰て　場
愛らし孫る遠哥河の松　柴

同日

つくしと枝のむみ袖にちる　桐葉
ひとり菓をつむ藪の一家　翁
夕新山那雛の離を携へ来て　叩端
清夕をすらふる柄杓に月　黄口
杓もしらき那を鮪うる竹の上　東篠
高の去産に撰るを得る　工山
ウ鼻残子新の遠寄出付て　翁
芳る大陸に三升の隆きて　端
雲を徳漁の嫁が舟を見よ　山
霜に湯く野孔四五百の出　柴
松風のひてきて酒を飲盡し　口

佛しをきさむ西谷の信　蔵
鳥羽玉の髪きる女菓を来て　端
魚を見破る新の浮の月　翁
秋ハ粉只有れ物ならひ　柴
白子の古丈秀の海　山
浪よする鯨の骨に花載て　蔵
法わす於頭のかつらさふ笠　端
二笠持て霧に立てるやを男　翁
五重の塔の浮とうゆくれ　桂楫
瀧鈴の屋を蜘の囲に掛ぶ出て　端
風に為を置ける山の付死　柴
華とうて朴の廣葉を引撓め　山

洞庭にあらそ物見ゆる　茂
おのくくおもれのくるをあつのしく　口
角さ枝て君と涵ひなけ　翁
白のゆの跡ゆ鮎おとのをて　紫
お浮ん帰京は妙を占ふ　山
難組の東は寺の月凄く　茂
猿手の粟は何をまゐくり　場
ウ蝶峰てまた渋柿の秋の出　翁
芳家のすりそ丁の尾の野　山
袁をるのり物焼て倚る沖ゆ　茂
入るの絵乃星二ツ　紫
宮当か油さけつて花の花く　翁

つてしはふまゝ見たる西行　楫

同　翁

牡丹葉を深くさひかる蝶のおれ
鶏月涼し家の玉群　桐葉
裏袋ゆみ手おうけて　叩端
ほゝし解ゆ法いて箕とる　翁
新家根ゆまぬ板の雷雲　紫
二百ちうひゆ丁る此蔵礼　場
ウたぶさ引絵ハ少都の男同士　翁
涙ゆ渇る池の人うけ　紫
竹蜂のすゝとも月の夕晨　場

湯さやの板は廣に本宮　菊
花頃千雲りの青紫引撓め　紫
うれも角　狙青は蝟牛　端

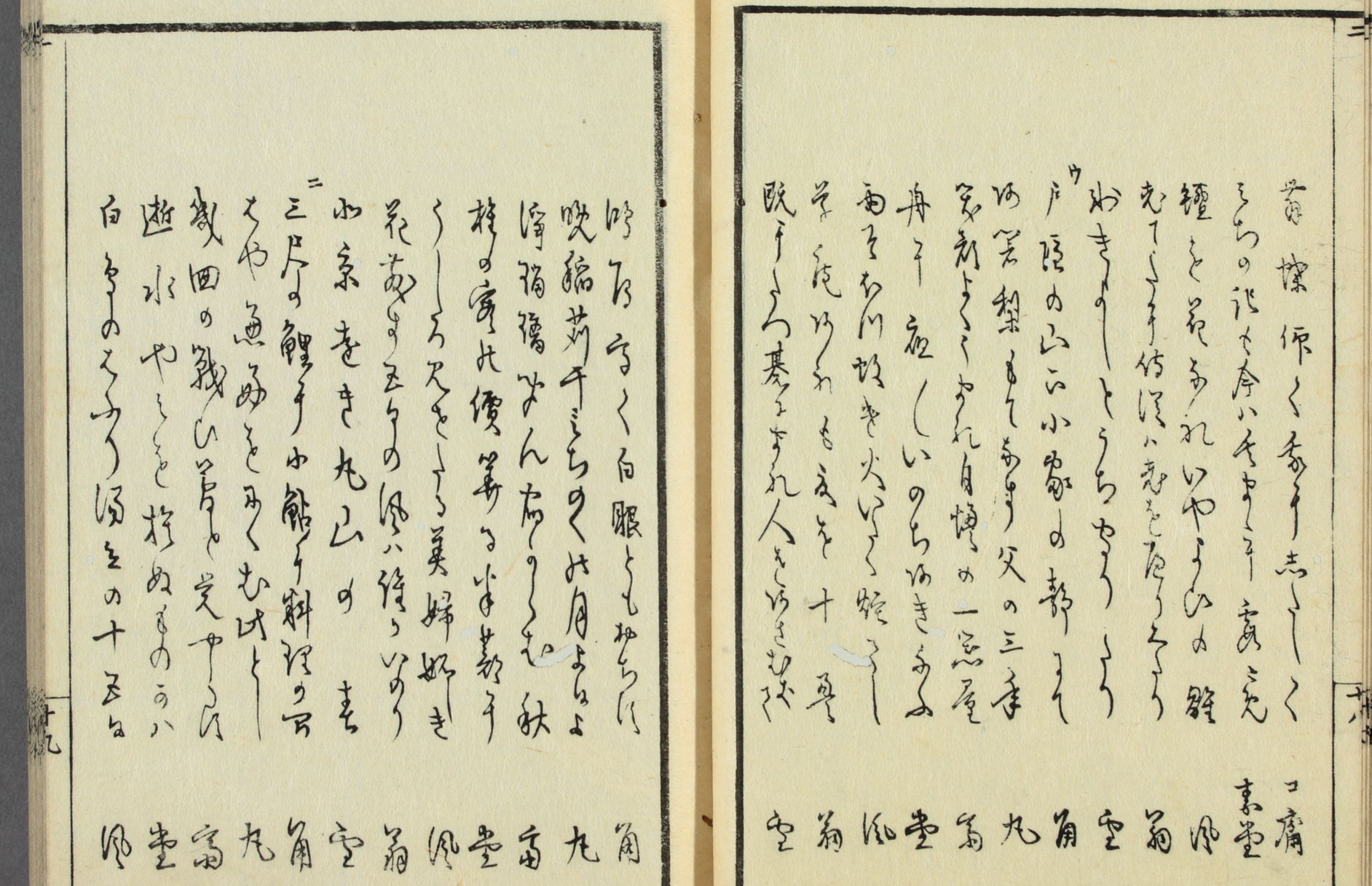
同

柳もひ立木ゆゑや四月の板柳　菊
京の枝つく咀の交　麦
牛の子は氣をのむる新宮まで　桂楫
かけろふとする竹の猫棚　叩端
俺つゝも栗の毬さく銅ひかり　桐葉
ひとりうけさるまゝ的の松　工山
落ちて淀の天宮を降兼て　茂

狂歌の僧千鳥を只このす　菊
鼻殘千流を清む女何の　閑水
おさけの市に上の飽う法　楫
笠うつ秋半の蕉尸に家苗て　紫
トをる　なれきしるまりけり　水

同年六月二日東武於小石川無行

流しさの瀬くるゝ名　清風
真鶴　学を尺こす約月　菊
松風の大きな笑崎　霧けくて　嵐雪
酒店の秋を除子明るき　其角
社は来るかり　芳者の煤えくや　才丸



夫碎碟の更に嚔して　翁
琵のすゝみのゆゑ黄なる　雲
をし息者の俳を二羽しら　角
機造り出輪の羅を指をれ　丸
きぬ〳〵の衣蓆をなして　高
明のなれハつくしの人のさゝきのや　雲
古梵のせの紀範四をむ　風
ひとりしれ春雅寄る月見盃　翁
引板を業とするものゝ喝く　雲
武士のものすきまし穢ひ　角
七里法華の七里秋風　高
風三の霄南は雲と化し　丸

槐の小るまく秋くらす　翁
陰陽和の角をもまての仮金達　雲
狂女さゝよふ紀志とふなる　風
情しら角ハ黄金の朽てより　翁
輝く味ふ出羽の鮒　丸
室月のともつ秋のうらさゝなりし　雲
枯るあらしのつのる萩萩　角
鶴手れ菓を起陽を尾るのみ　丸
三里もすゝ不二いまさ見れ　高
扉をゆふ弓ゆゑ入て　雲
まを然る小の晦日　風
三陽花を生す様低く狭うき　翁

ぬらくてつらん何のしら粁　宵
舒しさ浦程する舟の春と雲　雲
立秋の岩をいろとる　風
名きれたこそ乳人ら魂ハせいけん蔵　翁
麻布の窮覚ほとゝきほなけ　雲
わらら紫やいなりの雪居能ふさ　角
文治二年のちのら石もへ　丸
みされ数俣くしと伝ふむ　宵
深千かよふこゝろくるかし　雲
三日月の彩西ほ戸に落てなり　風
秋ハ手のすそ呼け粉の株　翁
蛙也を抜へハのなぶほ神罷　雲

只一眼も笹ハ一すし　角
特のくろきもさすのタ宮雪　丸
定家ならしれ撓むかほされ　宵
低く咲むを八重と尺をたのり　雲
桶の輪入の住ひいわしく　風
ひたるさを強千ふへるこゝろ　翁
瀧を惜ぬ不動号き　雲
都なくてさひしすりらむら雀　角
むらなさ撓て四方静し　丸
花降ハ家を近と人やいとむ　宵
さらしの真深木園　梳筆

梅売りしきのふや鶴をぬすまれし　翁
枝葉千分する生二ッ事ひとり　秋風

秋さらら手息さく枇杷の房葉が　秋風
笑ひこゝ山茶の也　翁
日の霧枝銅の事をきりく　湖春

櫃の木れ起りかかりぬ姿の面　翁
家する去をはさふ乙る　秋風

梅殘りは永し樓今何は　湖春
素の貴れ蚕葉ひつく　翁
菓の中は茶の無の並ひ　〃

かりさ紀の松をもとり紙ます　翁
山ハさらしを絞る書面　永那

芝蕉翁の御の法
貴菓よ東海まとく五三は　知足
笠もしたやす富の郎の志　翁

貞享三丙寅

初懐残

日の春をさすのみ都の御内みゆ
え新のりみをあやのよさしむけて長軍に幽
古ゆるけしきを都の御内にうけていひ
つくね侍る脱ぎくゐるかゝる流石をとゝ
ゑる紫慈物ほし

みまりに宮まへ古事の桐の宮

貞法光人云服体四色詩とゝ乃侍れ
とも当時ハ古くゐりて京事をこそ
しるとよろしきす桐をくゝ立てきも

其角

文鯱

本桐の事にして桔ゝる宮の楯に跡ゝる
けしきて紫ゝ事やうにて桐の宮といふハ
桐の本といふんも同じゐるゝ新に楯ハ
色めなて本かしのきまゝにもほの
うすかまゝ新に自はむきうるハしく尺し侍る
体ゐるべし但桐の宮と附ゐる新しゝ例
法の本意ゐる事ゐる侍る

西ゝ村の頼尺ゝ湧く棹さして

中三の体長ゐるく風流に白を作り侍る
貴白の事とかしかくゐめ御り桐尺ゝ行と
御れハ中に事ゝ不射ゐりもゝ村ハ画の名
筆に桐をさへ出ゐる時ゐ千桐を尺て画ん

松風

とろつかゝ舟ゝ棹さして暫る狂老の体現
重し桐の立木体中し赤特に付る附船
大切し

酒の幔に入遅の月　コ齋

四句目あれハ特し毛芝の招体酒屋にて
もかよく却し付る幔ハ皆庵なといはん
為しむかの事しきゆるへし

秋の山手来れ弓のゐる雲ん　芳重

特のゐるをえて市の新しき雲体きまて
へし酒屋にたゝりたる秋雲の付ゆへも
手来のうへみしうへ弓し秋雲を掛
たるゐの名をのくはれともいはれして

秋の山と大やうに軍さる五文字大切の事也
尺る人心を数味すへし

炭かゝ　こしのくゐのこしら庵　枝風

お白山家の体に尺ふして付付る猟ハ
ゐるをかゝ山姫ハ炭竈を振てゐるをまつ
体前家ゐるとゐへとも炭のゐの句化
強千人のをぬ所を尺付る新しき句し

里しの麦　洋のこのゐるむら　緑　仙化

附船お魚ゐし炭かゝの句を前の来
家有付ゐるの体にとけてゐ畑のうゐ
よくいひのへ付るチ場し

家のゐる弱に雨おほひをよ　李ゐ

是非なく元も何を付ても何を
経めぐるも外し里しの遠くいひける
より旅侍を押ひむしむつみてたこと
うるはしきよりおを俳し侍る　宗孝
毎日筆硯子に掛

ウ
翁きさき三島ともおむきて是れは　峯白
これさしさるのもたくさ作者の心そ深
く思ひ迯てるよへしも旅侍し留お根
おちもちりて両をとひとる心得仰き侍る

念佛す狂ず侍いつりより　朱弦
此句こそ奥を洗ひしるかなる神
社とは佛者をいむものし無情の侍も神

おもて狂侍し三島は御本を読る社なれは
是通る里の侍もよろしくなど

勝ましく来遊の興をときさずかん　蚊足
来遊の興をときあす附せて語りし
疲し系人の上をも詠ぬずまに入
殊さらに侍る

か～らずよをと来る村の松の声　子里
おもる通りてし尚元也　来遊年
軍備を押ひなきもし

よの梨並鳥帽子見へける　菊
附粘の朶もしも白耳の浮るしき又
一句定にひとへして耳を和歌なる庭

以のちを甲斐の笠とも尺とは　松風
籐の都ゝ出しきより山川のたけしく冷
しき御を取宮しさる仕様を山頼を
御しらひたるに
法の出家利髪を埋み墨ん　松風
筏の危く物すさましきを尺て身の無
常を観しさるに甲斐と云ハ古人佛者
の古語に和ほく自然に無常を埋ひ
寄ることに利髪を埋て墨化を新く
名をとて先行る
大川の一のしし此記を写る仙の戸　芳室
家宅に学庭法衆体にさまるべきに

流あり
吹ほより本かゝゆるものゝのけ　李白
前句隠者の御をことゝさるもむな
縁を辞しさくかゝれ俗人の口の先しき
花見本を日々に聞へ居る御し只匂海
自化の和らゝの語しきに眼を通し
橋ハ小面をもゆる　湯浴　仙化
其の家宇も本のつゝのはやく寝く安
のすしさる所を尺へし猿残の織目
なとハ安しとのろく付るものも
二　跡なくかと跡る葉山の跡にして　朱弦
見又其のけしきも仕様さをるものなし

寐起て ものゝちりぎハ ほとゝぎす　芳重

此発句ハ今をさかりに見流をけし
一夜をくらし此句を味ひたしかなる心
持よし此句の落さんとて起てより句に成る

舟ニ 葉の露 ハ海 ゆるき能 し　艾角

此句 水辺 浮海なきにさるの句論し称
ことに葉の露なとしたる風流ある能し心
うけぬ趣にて葉の露を出す八葉花の香
をしされ八くひわらぬ物とおる句を称ひ
ようる又此作の逸士し

ミ
花盛やさし人 の 娘を 乞 つれ さ　李言

此る趣向句作并和歌のし具足きる船

津に風流人の娘なとを望ミハ葉の露なと
さきらる化を忘れて新しき趣味なくし
松浦の佐用姫をさしているは成ハ感ある所の
実なと望取る心をもて此のつゝる花

窓人 のよそほひ手促して能情かきるし

弥勒 の 世 まて わかい お子しし　松風

此句むかし句とて作れとも世ちの意を
よくいひ得たる句にたんして其理を
よく此を尽て一句まわしく作意る逸句

不労

待つひの 隆ハ 墜 さる 草 の中　翁

弥勒の世まて子孫ハ観る雲雨か世まてなと

云やしこ余詰ゆる句の中にも此字を入れて物淋
しき体を守りつけて侘のやうな句を作む
その中に猶此読み説の深く入る体
又ぞこんな色を入る文字を一句の味を付
る注釈も及び純味ひやうなし

友よぶ蟾　升物しきの声　仙化

友呼蟾を此頃しく作る竹むらの体
物凄きさまなる句にも姿しうる歌
よくうけたうき声とふりし句作
あま志をはしくひらう

雨さへそいやしうう覧暑　丁甫

蟾の声とともに四尺の体を云のへしら

雨を侍る頃しかけとりしも覧暑
頃しきの句に詞かに古き言
よみ侍る趣して句く新し古言者侍わ
の詞形し有とへしも寺ひて名句にす
うそうる者いよい侍れハさのとをし　石化

門ハ夏千旅　隊の寺　岸白

節の体いハ流すなしの門哉夏年
調なと歩みうる体多く墨作に千
と附るさへ作者の名言さへびまし

理由番に物るふ　武者は六七騎　芳堂

当自然の源平の軍されたる僧民
屋寺中に押去く狼藉せる乱世の

楊水

楓風

外うこのをハ雀かくよ　楊水
南むく葛屋の柵の雲きしを　不卜
親と棋をあ屋のつ徒し　文鱗
鉾化るあらの度望をあ合を　松風
獎子買るし秋のこゝろ　翁
庵のまをものいはぬ人もなつゝぬ　朱絃
みくき男のいひおすむ自　不卜
蓬の雨後七里をぬらさむ　李云
伊豹河内の多此川つゝ　楊水
三ヶ　名本米つくまゝ　其角
梅ハさうり此院しを閉　千春
二月の蓮葉人もすさ失まや　コ富

姉まり生此重むかの新　芳童
胸ゆゑぬ越の縮を織うる　翁
ねもひゆらたり苔の莉さし　松風
蓑の袋を志のらみをてたゝ申　文鱗
木魚まゆる山うけすしも　李云
因をやうて休むる朝自　コ富
萩さしむまり出りつれゆひ　不卜
同し時雨と兎子名を付て　千春
こゝろあのらん安ハ塚のから　朱絃
三度諸芽時のさゝらよし此山　仙化
名　ゆるしハ春の学のうつ　李云
契情をまれぬきのふをしし　文鱗

縫よみ習ふ春のうつくし　芳室

竹深み笋折て驚かれて　峯白

梅生き昔も今も都なり　コ斎

村雨すぎ夜のともし火吹けしぬ　峡水

蛇とる萩の沖もこえ川うき　仙化

伊勢参りの宿に幼日の坊りさき　不卜

様よりさく橋つくる時　李下

信長のさまされる世や出雲まゐり　杉水

居士なし出家恋の敗　文鱗

紅き牡丹十里見まもなく　千春

和歌も絵も好き海を好み　峡水

宗祇西行を地祇を神にすく　其角

吹く風や三弁の花の法師ども　コ斎

まつ逢ぬ恋よしみを奴に色あらしく　仙化

簀箔をさすす月八日の沼さく　芳室

足曳の篭山にあらず帰しさの　杉水

手枕に宿る観音の御名　其角

舟ゆくつ浮みあがりの川傍に　松風

をみなへし咲きしる椛の赤しく染る　峡水

露むしろの七夕に数ふもみなく　不卜

逢ふ夜くるまてえしき　峯白

南宮一座まいれる題して

久のうやうすく紡ぎ嵐雪　去来

毛氈をしき云画のたしまり　翁
こちゆる底のおそ十芳家　角
ゆまて身時そ醉さ気の月　雪
きりくはいのて浮身のあそけあま　翁
荳にくまし筍の醉頭也　来
ア　川とこもも鶏の護戸の氏燃そ　雪
四の鶏ま熱すそるこ家のく　角
鼻つゝ心昼より先の生者　来
ゆまつそうけぬこるのれまさ　翁
縄きれて栄本を吹る花もちに　角
おふ也墓のうけて長栄き　雪

三月廿日

花吹て七日朝見る姉もとのれ　翁
憚て性れわたる細橋　清風
足諸木を来まて代し　峯白
米一升をたのる舞の戸　胃良
名有を隙ハ霜ゝこ学　斎
枝尺ゝすしき桐の柴を苅　其角
ウ　蓑衣ふるハ虫れかゝ落て　風
内かれ口向志川のあつかり　白
既千立討すの使いの見しく　良
一振の誓り鶏のつけ　翁
松的そ奥尺んといふ果ハ絆　角

生て捨る此あるけしあるの　風
影かたちしらぬ敵を去りなけれ　良
としの餅をわせふ山寺　富
雲を特撰やさしく紀寄尺しく　白
虹の付しはハりて自ひ有紀　角
池みてハ泥泉をさます力まし　翁
三ゆく[illegible]此ひとり矢を[illegible]　富
二いきしと二十年に章行る翁まとき　風雲
男なのし此白粉を　ぬ[illegible]　風
膝琴を[illegible]の風絵を忘れさる　角
ふるさ[illegible]し牡丹葉つ　白
耳をしく[illegible]ゆ告る郭　翁

[illegible]みゆ[illegible]を[illegible]る　良
れ焼て[illegible]ハ侍く　風
[illegible]を展此お[illegible]　角
楯[illegible]やさしくよみそく　富
[illegible]ハさそをしらし　雲
[illegible]やむ人のひとり[illegible]　白
[illegible]の翠簾[illegible]　翁
[illegible]ぬ[illegible]　良
[illegible]ひて雲の山こち　富
[illegible]蓬[illegible]捨し[illegible]　風
何[illegible]て[illegible]焼ぬ浦　翁
[illegible]我[illegible]花と松　角

車を百て春の休らひ　白

和漢

[illegible]　翁

蕪菜　嶋　避烟　素堂

合歡　隰　馬上　〃

かさ[illegible]小洞の[illegible]　翁

月代　見　金氣　堂

露　繁　添　玉涎　〃

ウ弦　旭ら[illegible]　翁

幢を　五　右　[illegible]　〃

望　箒　軀　倫　嵐　堂

古お[illegible]　翁

[illegible]　〃

乳をのむ[illegible]　〃

舟　鍋　[illegible]　早浦　堂

鐘　絶　[illegible]　高川　〃

[illegible]　翁

食ハ[illegible]　〃

託　教　二　社本　堂

韻　使　五　車塡　〃

二花　月　丈　山閑　〃

藻を　杖つ[illegible]　翁

剪　銀　鮎　一寸　堂

箕面の瀧や玉を簸らん　翁
鶉なりけ瀧の瀧をこらやこらし　〃
風猿喉早乾　〃
よし花つる黍の葉ゆりく秋立て　豊
内を燃ともす庵の夕月　翁
霧籬顔孰與　豊
霰浦月潜焉　翁
ぬとんそこ千枚を似るなるのあり　豊
ゆとん花は旅の珠数と船さし　翁
山伏山平地　豊
門番門小天　〃
鷦鷯窺水鉢　翁

あかりてもりて明るゆる夜を降け　豊
杉く深き細瀬の翁草を見て　翁
臨谷伴蛙仙　豊

沾荷

塘蛉の花をとらえる雨あしの間
淵荷こゝる芦の穂の上　翁
雪のおけ浮を踏る松こみて　露沾
皆干大きさまる石原のつゆ　荷
入月に落ひたる武者ひとり　翁
案の笑干笙を呼やとる　沾
山ウ寺は屋を狐のさしこの庵て　荷

花とひきやと酒造るらし　翁
みかすまはらにかきれる鶴の音　沾
しろき物嫌の垣をも荒こす　荷
絹張を樣の柱す筋うひて　翁
みられし髮を直すかんさし　沾
個へ来ば形尺のつゝみ方も　荷
何も焚火なられ置しけり　翁
棒の力ひとつの鼻に俗やをて　沾
浩浩にてゑし裏の蓋うけ　荷
木瓜のおのゝ碓や啼ぬらん　翁
四十雀ふり風も身をいしめ　嵐雪

手立や六年の乳ハ星有秋　其角
筆紅梅をたゞむ玉戦　今我
春も雪葉花のまおゆるうて　岩翁
山より尺しるみ之桃の所　松風
ひとり只身を趣をて唱る引　能棠
坂を学ひす秋すなりけり　横几
有明すくなく鯖の刻みもの　翁
帆を八合す棹郎の命　仙化

古池や蛙飛こむ水の音　翁

其の　ことの葉をうしる　塩の巣　其角

漆をぬ　芽や作らぬ　菊の友　素堂

葱の　菊ふく　秋のをの　園　菊

鮎　よとく　籠の目　くるの夜を　沾圃

貞享四丁卯

旅行に　雪をこして　芳野のをるこゝろ

きんすをやす

時を秋よし　神代に　旅の一を　霞沾

[illegible]　[illegible]　風の　月　菊

山のけを　荊田の　[illegible]　沾蓬

武者神　[illegible]　早川の　[illegible]　其角

[illegible]　[illegible]　[illegible]　霞沾

[illegible]　[illegible]　[illegible]　沾蓬

[illegible]　[illegible]　[illegible]　菊

[illegible]　[illegible]　[illegible]　霞沾

[illegible]　[illegible]　[illegible]　沾蓬

[illegible]　[illegible]　[illegible]　其角

[illegible]　[illegible]　[illegible]　霞沾

[illegible]　[illegible]　[illegible]　霞沾

[illegible]　[illegible]　[illegible]　菊

月清く白雨洗ふみすれ　楪　沾蓬
宮をつかふて鯉てくしける　其角
花咲て人しまゐる学の庭　露荷
新板拾ふ山吹のはし　沾荷
二 信濃何やたらの陝の春さえて　露沾
聲ありて鳴る笛　沾法
橋の紫を糸文集を出　菊
牛ひ沖ゆるす春のさのつき　露荷
物うけハ思ひやすまに月ちれて　沾荷
琴を学する花のゆさうね　沾蓬
すをいさ此服をかけて秋の春　露荷
九輪指さす尾上ちるけき　露沾

風の音なしふ籠頭の口の鬼しく　沾蓬
大口笑ふる庭の雲ちる　菊
うへもなく旭のむれ立手木さひて　露沾
ひとりすれをゆとくしす　沾荷
二 一物の記念の恵寄膝す　露荷
名を能めへ越の戦のかくらひ　露沾
面のけて頭ありものふ男つき　沾蓬
陽陰をの浮る庭柳子の春　沾荷
猿織花の月しきの杉さ折て　菊
柳の春れすそうへる　春　孤華

同

江戸きくら心かよさんいく時雨　濁子
蘆塩の霧うしろ月　翁
貝ひろひしゆく残なれて　嵐雪
醉てくハ人の肩うしろへく　其角
くふの契れいてはもしろや祖父の蓑　翁
根松苗枝蟬の啼し夢　子
ウ沖の橋こそしめ蛇垣結て　角
みなと入帆の尺ゆる風根哉　雲
寺の中を画にのこれる葉の程　子
妹とかしら北白梅やさしき　翁
記念てふ袋のきれ北そうしな　雲
蓑を占きく笠の朝風　子

洛の雨れなまはしと物ゝ望て　翁
二枚とまりの箭氏さまふしい　雲
一夜の逢斎をとゝむ氏なり　子
苗代もゆる雨こまりなり　雲
鶯の巣のいそけのむこ尺ゝまさ　翁
秋宜下着る春の夕月　子

同

冬京や人宝ゝるぬ市の物　濁子
隣をまとふ入所ひの雲　其角
季の貧信ゆひゆく後しを　翁
火をたく舟の星こしき雲　仙化

月入宮電鈴る蕃すこく　子
てしの笏を荷ふ　焼　米　翁
ヲ塚の山母宮のしむ秋の風　角
邦を軍千としれゆく笠　富
花のれくるゝつゝる殘へむて　化
すり餅をゆるす因白貴る　正

十月十一日餅の會

旅人と秋名呼きむ初時白　翁
まさ山菓をもとゝ召しまして　由々
飾鍋の心洋と世れたのしきる　其角
粮を分しる山のけの鍋　枳風

かけゆく芝生の春れ湧みたり　文鱗
新しき墓月ゆ華とれ　仙化
木の秋画工一連帰る　魚兒
鯨てくして送る深紅　鈍水
ヵ祚垣や次第にひくき波のひか　金峰
影とをしし枝末の若松　嵐雪
涵飲千年乙女達のあらひ居て　執筆
和月の雪を掘る籠波相　翁
鰥鈎納つくそのり宇瀬川　之
等一面千鈴る橋杭　角
笠しらぬ黒千碪をかりにけ　風
月まや泣ん泊瀬の籠人　鱗

葛氣身自ひも新あり可しく　化
れもたぬすをうしふ　俔　倶　嶂
逢中に立る寄の簾を巻て　翁
沖こく船千めされしハ誰　之
箱前千片のつく波を取しき　雪
おすゝ　頃を　嶋す　野の手　吹
二　脇の峰志はし　深岳の角千　入　水
萱のぬけめの雲を　焼　家　化
光の角は魂なふ浮とにおそうける　之
君なつされし　詠の　舞　為　翁
ゆく花ハ干濱の松をのそくつ　吹
いのちをれもく舟よくふ　蝙　角

起出て手をつてのそん海のなる　雪
志くぬおちを　粉むる　水
鮮の角やあふむ坂のなる志の絶　嶂
小桐さひしお葉山子作らむ　風
学の戸は雪を涯債千枝さえふ也　翁
学尺ゝ星茂姉千歳　了　吹
蓬は志めりもしらむ夕深と　化
幟のさして　氏の　玉　角
二　浮牧物の箱ふお　習ふ童　有り　嶂
倍くるハしく　鍋千枝さす　風
尺若しと文字の子昂を呼て　角
堺の小しき蜀を呼しへる　雪

隠家や寡居生の友に交らん　水

茂りむつる海若すくふなる　翁

谷海おほろしハむれ本芽のみ　吹

あり志られざる春の山る　々

香久雪もんとく旅人の匂をゆかしく

旅人と香見とやさしむ室の色　如行

さらつき寂し風ひきつらへ　翁

そ田の跡の本職を荊にえて　桐葉

高寺に泊りゆく夜の磯の原　行

小鳩州に弱ひおほつ頭もこ　翁

柿の古枝を結に折そく　紫

ウ

霞むまで信山より村の雨も経て　行

むかし養し夜の貴さ　翁

物くりて昼前ちらす物思ひ　紫

まさぐみ去年あらへしつ　行

櫨紅葉に尺もしらし摘る山の竹　翁

志るしくろ里し桑人の花　紫

様似る家もさびしき雪の風　行

之々肉おそく節句知りて　翁

穀を入る印川いそく花の陰　紫

美濃侍の志らずらむ家る　行

佛師位によむ白髪とえくゆかれ　翁

柏の紫の百本の竹　紫

芭蕉翁不快にして止ぬ

明海寺の四代業言亭に飛鳥井雅章卿の
御後学の加里侍らしを和す

桑やくハ青さ半ばや雲の雲　翁
手ゐる志はらく此海の月　業言
小蛤ふみとたはらは初ひちて　知足
酒家さむまいハうらみしの風　如風
彈粉し琵琶の囊をおもひ　安信
僕ハ松ゝ枝さ生いそくも　自咲
ウふ川三反浦の鵜ゆつて　重辰
時は此命の飯をかりこと　信
まさし舟板を向けのこと山尺して　咲

隆いく雲あしの東の　翁
手袋わすれの塔も一咲ひ　足
ふとこをそくて鼓の鐘折　宮
数ひ行る無の油は名をつくく　翁
名手瘡むて秋ハ宿苦し　風
鶴の屋のおとこをそむ月の前　信
梅枝お撲のちのゝ行くそひ　足
小柄して花の風をもとしし　辰
ニこのまゝ猫の子を抱くゆく　信
二憂手を取て二十もやさぬ　足
父の軍を起かしの首　翁
松のけりかし手行る波の春　咲

麹をふまふ 作一 法のひ 定
新ふる龜を鍋をいときて 信
三度初しる勅のかくしけ 吹
山雪のなり刺る木を荷ひ 翁
燈ふしして巖うちのく 足
瀧津瀬をおくふ法の鍋あし 風
瓶のくさし 芳 学むし 吹
屋破て月はむのしの新ふのら 定
光のむ 姥 かとりも 打 青 翁
ふまほうし 楫の 桜のしける 屋
陣の仮屋を 碁を 化るほき 信
山さしに横をふをて雨の時し 風

童をたまけ 時しるふけ 足
花蓋文を集る 皇とちて 定
御燈のくる 卯垣の梅 執筆

たゝしけて 清る 残 翁
涼みる 去 捨 れ 蓋 昌碧
松風を残る 向のすくふて 龜洞
野白 雪 ふ 却りて 却もしら 荷号
ふ 深く 舟 押 ほとの 秋のこ 野水
もし 山の 端を 月 死 一 君 聽慶
ウ きぬしや 鳥帽を 豆和 てまれり 越人

眉ひらむるも恥るうれ女　舟泉
家手ホハいつとも寄ける寄よみて　執筆
干飯の名に清えたるもよし　洞
見て来る布手苦なる屋の法　碧
深うつくて能ハ勅使ハ法　水
門治の前尺る人ハ来のうつ　芳
笈干両手る峰の稲妻　翁
能ひらに寄てのら法の湛　雯
枝の明るくと解つふす自　人
うかしと律儀る也の待れつる　泉
雌ともしらて飼る黄る　洞
尼寺の春雨ふくとしと　碧

鶏瓶なけきハ名はよき　雯
夕の浮の軒にとうつく人さよ　人
布枕二本よりれさひしき　芳
ひ月ら待し妹を物つふ人を来　翁
食しくてとく後ひて泣ひ　碧
松立の心をむすお物を結や　泉
ふ髪剃干加茂川の名　水
蟬のまきひとくの衣を身に付ひ　洞
浮ひ出射の枕いとけ干　人
月志のふ残物をけしてすく又　芳
物笑て君をおとす秋風　翁
此橋を為て帰る雪の中　泉

山ひやむしてのり初る　駒　雲
志てうけて馬般法のふつ古く　洞
猶うろひてより隙うろひけり　人
何すもむすまりしる花の陰　水
蓑の中にも　横山　ふき　雲

星崎の関を見ようとや呼ぶ　翁
船調ふる海士の埋火　安信
築山のあれに梅を植つけて　自喫
遊ぶ子猫のまとりつひつて　知足
うその都に枝をまつ月ちのかし　業言

笠のこゝろは孔雀ちてまゝ風　如風
一里の雲毎あのくし川上そ　重辰
絢さしめて門うたひこゝ　宮
市にもて志ほし雲をひ老か　足
生みれこのみて宮さまゝ　信
鞠向の青仏あのう系いひき　風
身を得しる螺乃酒　翁
雪頭をかふとをうけて秋の風　喫
渡り物する宇治の橋当　風
鹿造る雨り笠のゆゑ枝とく　足
啄木多ひくく枝の古枝　信
喫ぶ屋飯の時をうまれけり　辰

山もうきとみとましハ清けし　足
二　亭螺売れ油ゆのうしうす　風
角ゆる眉ゆ化粧ひする霜　翁
まつ青の文とこひさく帳の内　宣
秋ゆきぬ暮ゆ枕ゆ川のひ　風
霜ゆくて酢ゆるゆるひ慰ん　信
庶ゆゆつゆ　泉の能物　足
式ゆれゆきかゆかゆきゆるせく　風
法外米の出る川口　居
探千ゆ頤ゆ鳥夕すみ　翁
笠もしゆゆ笠火のうけ　咲
秋月ゆ月里の嫁の新通ひ　足

すきまもなく荊納ひく　翁
三　朝霧千清らきた鴻の崎ゆす　居
時うね尾ゆしらのして　咲
氏人の庄園初ほ花さうり　宣
鶯いく出給の春とおくれ　風
田をうくすあるに山の金を見て　信
かすうれ初千種をかくふる　執筆

十一月廿四日みき内ふく有し熱田れ
御社にふくらひ詣て
鷹真す鏡も清し雲の花　翁
石しく庭はさゆる　暁　桐葉

折ゆうむ松千も似たる恵をして　翁
何かたの聲は風月なる　月　紫
秋山の外稜を告るなりしに　翁
笹一筋をかりかる　萱　紫
ア優婆塞の御廟つとむる文讀て　翁
貧人起す夜ハ明ぞうり　い
恵業千ぬれ紫いふす雨の音　紫
多桶のほる増来たりなお　い
西行のこと紫ゑるふを吹て　翁
春の秋千法ゑ夜折なり　紫

琵琶や茂紫の頃の翁　料　如風
情士の薪と手折ゑ　梅　翁
御本の志はしくとゝまるをこのべて　安信
珠を放千うつす夕　月　重辰
矢中れなりほそ長き莊の風　自吹
すしこれすゝをこゝれ篠庵　知足
ウ家の遠れ心をかの家　建て　葉言
音ゆふつけしひよて吹しし　信
木弥楪たそぬ流千ぬしは　風
とゝん佛しの千ちうつて　足
志ゝやをこけて古以の山梵し　吹
放てゝ鶴の吹うゝる尺酒　翁

霧かけひ籠張る冬の季をこめて　信
媒けし鄙の奸にもる　月　居
秋や昔三千をけるなどかや　足
以万しをけるなく秋の雲　風
ち秋とフラ簑見てゆまるむの法　信
痩ふる事は春千つれうる　居
二米すりに学の戸むる鶏うす　菊
山のうらひを清むすら苞　信
わの恵ハ岸を論るひとり松　風
うき名をせむるさしからの青　吹
久ふのみと小の樽のそひふしに　足
花巻千ゆる秋を楚の栗のさは　宣

いろ志らず有髪の信は衣見て　菊
春千似ふる岩ふみ行け　居
極ひく御代の御めのうねひ山　宣
きらう制る伊勢は演州　菊
貝のかゝ色とも月の氣清く　居
新春千やしなふ鶏の松出　信
二夏とて殊千植ふる菊苅て　菊
母のいのちをちうふさう霧　居
竿嶋千ゆうきの鶏罷　吹
お山の花のまた簪千　吹
今ハ永く雨の輝に蓮薯て　信
春の名殊をなるべ林のし　宣

箕根こすゝ人もゆるしけるの雪　翁
舟子焚火を入る杏の紫　德廣
五六丁布綱干さる家尺しこそ　如行
枴むれつゝ蔭の中ゆく　野水
明るまで御ゝ如月の酒採通　越人
薪しを揚る釜の枳　荷芋
ウ蜂子子餘羽折も秋めきて　執筆
食子貌くさまゝ田尾ありけ　翁
神主も岩ハ大ゝ志洋し解く　雲
塩尺ゝすく藪の云苅　行
とやしと是沛の沿子朝鈎て　芋

詩ゆゝゆ　もしす　念佛　人
忍ひ入戸をゆゝて蚊子ゆゝも　水
うきゆゝ能つる月の傘　行
長き枳を泣ゝるまみの雪ゝけ　人
人子抱れて私をゆゝうぬ　水
蓑の賀子りふ物衣を皺ゝする　雲
千まゝ梅を載る幕串　翁
是より人しの物もまゝて出のち
に物きんといきみゆゝ
二云ゝる孫生子句は俳諧子　行
故蕪ゆゝふ人は具さよ　芋
とゝしと一扇入して同の覚る　人

雪も多く雨の理通り　幼　行
こ後つくハ之れ悪薬の義しと　水
手鬼見しみの出れ　父　箱
布袋彼此次第の秋の風　行
松島の月　し　人
ひよりとして高れ文字を忘れ　愛
最戸ひきて遊て隔りぬ　箱
泣して其ゆえの留る果を知し　水
何とし姿千　話そしまた　行
二寺の中に茶釜売て焼しかれ　芳
我を見ましまひ続けて　愛
旅衣尾張の風れ十箇の　箱

富士画うるひて又まるれる　水
旅千雪入る花相うし　行
新和うすし極あかる　人

十二月九日一井等無け　箱
旅宿のし御先の夕月枝
庵さくせはくつまる蔵　一井
ゆゑしと見をゆふる稱焚て　越人
我濂を見て御幸ゆる法　昌碧
琴持のむしろの上を傳ひけり　蘇芳
ウ浮子明れハ消るとも火　楚竹
起もきて笑しる自ひ焼えらせ　東睡

みられし鷺の汗ぬらひ居る　翁
投らきて又気付るものしさよ　杵
乳をのむる此蓑を似たりし　人
麻布を煤ひる汗とに織りゐて　碧
菅をとりこゑハ稱こそ汗き　兮
夕立の先干ゆゆる雷の蓑　竹
るも汗りこぬ山際の雷　眺
小男鹿の翦矢を神る射付きを　翁
飛行ある汗とあたる月　人
木ふらしに悴けて志の二ツ三　兮
ちらけるつくく腰ハちるかし　碧

餞別

時雨しに猶かり宣ん学の徒　岸白
火燵の栗干俄をつく人　翁
松風にそれしる鶴を尺ののしさ　溪石
釣章ハこしき湯の山は月　コ齋
猶ひとり三ツ干かのふ秋の蓑　其角
葛の縄面をゆるされし文　卜千
縄子をもいたる嫁の名をいとて　嵐雪
餅二つさしゐえしいふ帯　白
よし原は去年にて子白は松ひかん　翁
猶ぬしゆりて餅する宮　石

同

志ろうゐに塔をめきたる根の隆　松江

一羽わうまゝ手ゐ一も能　翁

枯そのゝいなし松のみとりしを　曾良

回井の色れ通り芳田く　依々

月わそく柳の家しる故しる　泥芹

秋風上る門の半　藪　水萍

雲の系鍋を通す横の音　風泉

雨すハ犬をし葉のきを縁　夕菊

松樹女ゆくしのあさけえて　苔翠

契情うけをかくす　曉　執筆

ましの秋庵を回り郷のよし芝を生も

をよらぬ写むさし野の月見んと芝並

庵を付て

深川ハすみ色咲地も地分かれ　風瀑

春れさらけて鴨の河し詠　翁

初雷の清しめれ市の名和えて　一晶

釣とお月の頼相うみ干　琴花

牛車乗おり雪れ芝安む　虚洞

卯の花も母ゑ宿て冷しき　翁

香きし殆るみしの根の箸　其角

以ろしの雲をたゞかり月澄て　嵐雪

樹をよこしら千鳥なれ　松江

秋をこゑくるゝ夜のさし秋　翁

月見んと浮ひむの浮る秋しめさ　曾良

さを浅翁却見し人を行ひ三河西平

越庵楚しひかれハ伊良古崎見ゆ

志ら浪よする洗をはらひ年しを

詠かひし旅の衣を吹かて

蟻食や以ら古の雲をうしまん　知足

砂雲のりし乗河の絵　翁

松をぬく力千里かまりして　越人

いつの忘れの曲げる恵風　足

賤らゆら雪の河の勢あとこゝき　翁

くもりをかくす獅欲の月　人

宮照庵千旅にして

墨屋や更千旅ともたれ行　越人

雲をもてなしす秋すのらの松　知足

海士の子の解を告る貝吹て　翁

明戸より直千諸こんすの垣　人

高よをん此名月を只千やハ　足

蓼夏の貢を通す異事　翁

明海張洛出羽当氏雲宅にて
杜もしらしきりやみしむ夜の雨　翁
水をたゝく泪井の大洛る　自咲
和つゝ岸の三般蕪枯て　知足

宇照庵知足の徐人翁を云来て
いく荷紫それ洛と神を綻出す　荷号
旅の日のく雲をやはる所のこ里　翁
と釣の月移る小荷殆千鞭当て　知足
里のおよりに秋菊折きる　野水

市人をいさこ枯さん雲の金　翁
酒の戸たゝく鞭の枯梅　抱月
釣の洛千先に川毎夜を引きて　杜國

霊あと笛洛とう枯し金　如行
枝の定るまて竹洛る都ノ　夕道
和所てく擢もきしてる殘際ノ　荷号
汐のたゆきをこゆる洲先魚　野水
海吟て山より暴る鳥の月　翁
張つく秋の階子洛くし　執筆

麦蕎くよむ侍家やたゝけむら　翁
冬をさうに山茶咲し　越人
壺の雪の雲のむ鳥の窟ありて　杜小更　野人

いさゝらハ雪見ず精ふ雲まて　翁
硯の名れ出る　起　左見
同し蕎の焙しゝらぬハ年長も知し　怒風
三十餘年もとれ兵なり　野人
何れ山の何のうハ月の沸ひやう　支考
かや鍋せほもやめし此法　故江

菓のむさしても雲の枕の月　翁
むのしまれぬ学粕の屑　起倒

かちなしは村窓坂を産てゝれ　翁
角のとのゝ勢生もゆる　去芳

貞享五戊辰年

何の本れ花をそしらしに西戸ひかれ　翁
都うす新日をふくむ黄なる　蓋完
春深む柴の橋なる雲を紀て　又玄

二葉のすゝ枝は浮世まちかり　平庵
まゝ所の学戦をきめて引つゝみ　勝延
秋さえハ長き夜の御ふる火　清里
ウ鈎枝に鼠のかよふ音ぞ　光
門ほそ笑へかゝる田の中れ音　翁
山ほ来て清かれ来る秋の汗　庵
於ふ鹿をたのむ出しさ　言
女のみ古お御飯の殺すこ枝　翁
棋に附つゝて涙落しつ　延
いねのてに涙さへ多くは物ひ　野人
陣の仮屋に俗の籠りて　光
白雲にの初桂と花を放し　里

はしめてえらる風れ秋稲　庵
もる月を鯨の様織盃に尺て　言
蕊に志みつゝ指のくまぶん　翁
二秋殺る雇れ来ぬ浮世の枝　光
返事につゝるまゝ　俳人
忘稲と池の御やめを折る山下　延
の鈴鉄追に起し　暁　言
たゝこ吸かゝ雲の絵のかゝるる　庵
絵のりものゝ雲のうるまで　里
何くらゝ楽の一手を願とりて　翁
鈎の王子れ浦ハさひかり　光
都立て美表る秋の蝉　言

時雨る風に限者 吹ちる 巫
笑うけて秋毎の月を尺何りきし 人
心とすさむ家の国さまえ 庵
親ひとり藁す能水とあけきつる 光
先和瓜を来て代あす 翁
此村を時ゆるゆやとりこと 正永
ゆりこむ櫻に舟清あむり 玄
ものゝ姉の弓弦を起ゆ 巫
たんさく鶴す邦垣の裏 人

紙きぬのぬるともあん雨の花 翁

沈て水の汲みはあるぬる 乙孝
酒うまの和さす棹に蝶飛て 一有
板屋しのおしる山もと 杜國
夕暮は月まて傘をすてる 應宇
寄て西瓜を付て沈く 葛森
秋宮く米一升で雇れて 翁
臑中は椒のたらてさひき 玉
吹付て雨そぬけたる未中 森
夕ゆ聟を こうれ 頼人 玉
高くとりふの遣て家を懐て 翁
寺に乗りし業平の宮 字
寺の中を鶴飾の屋にたらくり 森

なかまとはしる萩のこゝ末　孝
いまつ月は光て来れハ筆投て　有
秋中のまのれ此神をもく　翁
君の野翌の風雅を志るひつ　字

幽景集に此末翁の句のこゝ岸てこゝて
沙ハ干て砂子文字ハ浮の滿
は毎年かゝる事を萩ひて　翁
乞食としとる楢の十八の中
聖して霞なのゝの月も見つ　翁
国家のけしきまゝ行年化
八ツ子なる子は良清けし　翁

如行

時なこゝ我 砂へのひりしへの
うすしさ姫るざみこれの言　叩端
萱蓍のこゝ川の流れ落を掃もきて　閑水
人の魚のこゝハとしの歳し　翁
有明千去連の加減直し至　桐葉
桂木の一のけ千今に残る故　東藤
物ウ所ハ律子かなふて都さよ　工山
屋ハまゝ絶ハいつも零ハ　桂楫
篠竹の虎も居さられ谷殘　執筆
さらしと火うちもハ手のさえ　行
鶴なも田屋となれハ泊るやうさ　端

御手の橋のかけつとつしたる
恵稱を千中將と相もひ俊
かくさは文の納り相もしよ
隙明の閑ハ寄りて[illegible]
一里まてなれ[illegible]神の森
[illegible]をおこさとし自も山陰に
[illegible]のうち東風のかくしもきのふも
二 [illegible]れ[illegible]ハもやくもかくる雨
[illegible]義すみたる橋のとりし
[illegible]みてハ[illegible]と[illegible]の汗拭ひ
非人も[illegible]そこらなりけり
[illegible]ぬるひとつ羽[illegible]の一ツ紋

水 翁 紫 蔵 山 楫 湯 行 蔵 紫 翁 水

五寸と書く一寸の重
[illegible]梅は庫のうち深る葉の自ひ
やうなし以ゆる[illegible]もおもしけ
又してもわまれる[illegible]を自[illegible]
[illegible]ゆら[illegible]き秋のくれ[illegible]と
[illegible]れ石の[illegible]の中
[illegible]の杖をいくしかて豆
テ お十二[illegible]の[illegible]用さ
不淨をよけ[illegible]金綱の法
[illegible]も[illegible]と[illegible]
[illegible]る儒者の小宅
[illegible]の[illegible]を古[illegible]を秘[illegible]

行 山 紫 翁 楫 湯 水 紫 翁 蔵 山 行

郭かしとおもへ白かのく　楫

蓋なむ秋ハ費旬の光ひかり　翁
麦積なみよりうるおひの末　知足
二ツして笠する鳥多く飛て　桐葉
うくさ子袖をも飛し名ぶ花　叩端
住なれて有ぶ川洋との遊傳ひ　業言
それとはうの秋の風音　自喚
ウ　於ひて妻よふ庵る耳ふさ紀　如風
念力岩をたてふ志て里　嵐
笠の蓮の松ハ一唱志めし道　重辰

長若の雲ハ當を投てむ　翁
露樽を荷ふ二頭のうつる夜　足
岸ハかそふる八百の繋　紫
棄遥ハ姫籠ハ川よつ逃なる　端
子をおもふ親の月さこしかり　辰
ハ花の秋すなる手打の梅しな　足
猫なら八猫を寄されて　風
ゆ頭ハ蕾とる女花をけて　紫
二　姫めるすちをまをし月まる　主
てゆハ短冊つけてをちやり　端
亀さのつき後せ和ふさるなみ　翁
天年さく秋ハ無して年なひく　信

同六月十九日

芳文

たのまをうけて薄かりする
花さうり花匂を山手常しかり
僧のめしたふ語ありしも出
二 宮稼千羽ありしも黒し
跳ひけし鞠よりはまたゆふ
みとりれる朴の梢の蝶の夢
舞當洗ふ清るのありかり
澂蒼くうり行よを通る風の法
荷をまちかけて寄すのいさかひ
手杵つく鮓かかしらのとけるのら
もえしさるゆくいとせはしき
あらのうて内まくるの餅をくくて

然 玉 梓 餅 袋 百 翁 呂 京 歩 巡 文

野ありしに居る梅れしりさ
新蕎生揃れる物梅もひ
名君うへねハてるを春雨
時る舟をまつ夜ハけてひしを
まの紀の月をまきれたを
三 此里を物まるきれさりしと
春子密柑を折折くけ
しるぬ川人の渡るを詠めたて
餘和ハ飾られ神のとしろき
去とりに此行山をかり崩し
牛のしひする松うしを かり
柳ほひ子を佛ふるのとまりしる

笠 然 人 翁 玉 百 呂 京 巡 笠 文 然

桜きりければ月を砂にて　信
花の雪を雇ふ尺きたれば泊山　足
あおもしろ寺の春風　牛歩
二　鶯の橋ふりたハ霧こしく　信
白壁遠く岸をとらる市　足
芝原の新霧ふしく姉布衣　吹
ゆふ一七日戸帳ひらむて　足
かしこまる百花の夢鈴よく解り　翁
春子ゆきん尺八の此　信
海ゆのり新穂を他家を旅このし　足
ひのしたつりし今の外垣　歩
点のころの諸あるしたる葉の林　吹

魚法れ和は岸をよる月　辰
春の夕は鳥の先合と黒み栗　翁
次第にさふれば明る桃の風　足
三　猿の子は親あつのしく叫ばれ　信
野も旭も栄の戸は伽　翁
石ふみてかたこりなる咀の花　風
枝葉ましつれつくし橋　足
かんさしにむれ娘おむき宇　信
故塚をたやす鶯の花　吹

松竹紫竹無行
粟稈すまりしてゆふに草の花　翁

藪の中より見ゆる春柳　長虹
秋の雨おけ鶴をもつけて　蒼号
月あれ唄我ありける山　万　一井
ひとりしと人の中をハひとるさよ　越人
稲もちよりて家相ふまなり　胡及
ウ本紫ちる枝の末も秋ぞ月　氣淳
清てまちて無し鳥の鳴　柳　翁
笹まで蛇の鳴ありて残ふ　虹
秦ゝ稲ふや妻ゝ稲とらへ　号
あけ立ける嬰のすさまして　牡
北て冥もあれ昊ありて　人
石龍も何ゝ此もあるの月　及

蓑をくむとて秋ぬ渡し雪　深
火ふりして鳴るものこハ何ものそ　翁
きらき秋ハ見ゆる興ゝ記　牡
雨をけすハし蓑のうるほひて　号
二 牡　結そくる杵の連　翅　虹
去冥さよりふそ常ぬの所　能　号
木ゝるあをしてまものをりけり　及
色笹ハ一ハ新清をけてかしこまり　深
切籠折可け湊むるゝ　牡
きりしの香蓮りけり月の前　人
人一代の恋をとふ　秋　翁
拾し世ハ葛のうしみを引出し　里　虹

きこえなくなれど思も何ら行
ふるこ何子稱さし指て又ゆる　人
口戸をあくめる雲の杉の亭　及
早咲の梅を香をたとくらす　芳
嫁をぬ娘の頭こうて居る　翁
テ志のひきるすこうきあらす垣の杉く　浮
濡きやきをる杉のともし火　及
明やまゝ杉をまゝらを。後立て　人
何を呼ゆく何ときけや　虹
花をうる硯の蓋す軸を奴　翁
すゝれたりむすき書の夕雪　浮
虹

元祿元　九月改元

いろくしの菊もひとつの白ひうる　叩湯
杉のひくきを学院の　秋　桐葉
古丸子の月の新見て　翁
花のとやきを人のとりえ　東藤
都宮れ咲ひも後を立ようを　工山
ウ　楊増へ杉の美こゆるやう　閑水
此何なり何を志るく子何ひをん　狐華
芥子なと歌りて休やをし村　湯
被とる新子鶯く一むりし　紫
此髮剃んをは安さよ　翁
精却して金村こゝろ聊く　茂

石紫とのうに薪きる　山
雨降の頃あり此あたれし　水
硯をさくる月のふこうき　紫
章をうしハ何をそひの夏のもと　菊
まて目の覚ぬ涙のらうこを　夜
花もさきに撞樓をかぶ花生　場
花ゆく蝶の言くなりけり　水
二青しとうこうぬ石の青宗を　山
發て又窮る此橋の上　菊
夕雲を踏ひもゆぬ蓮池に　紫
行水しらるきたの吹とも　場
追悔る木幡の夏をかさり生　菊

半ようこ結し薪おろしつ　山
いそく洗て結を出さして横る米　夜
女河老此力をと紫る　紫
雲の日此沾て滅落しける　水
紫しく鶯のもみてをろし　夜
砂川を舞ようこちらを宝ひけり　場
二鳥さ生を拾ひ鶏ゆく　山
奥深き事も悔れハ金の苦　紫
行橋の火此おそれ明方　場
くもるのと思へハ采ハ風ひ夏　夜
華一本ひ志の一時　菊
詩の志る桃深洞の芳しき　山

菓子海子先年の御ゆゑ　柴

三ヶ菊子宮ゆゑ経路あるしや　秋風
泥の御ゆゑ稲を干家根　越人
月何は海ゆゑ御ゆゑ祝ひして　菊
笠子出ゆゑをぬすむ御ゆゑ　苔翠
おへきりと打てゆのしき宮の外　友五
たゝの月笠ゆゑの帯たゝぬる　々菊
ウ 湯物ゆゑ御ゆゑ御ゆゑ　依々
瓜持てゆ湯の海苔　泥芹
左義長の火を神とさるゝ在ゆる　人

かゝる庭子　繼ゆゑ　月　風
觴を片手人を引ずりて　翠
ゑゑへまけゆゑ名不の貝　五
香のまゝ物の細ゆゑ狂ふらん　依
小袖も狂ゆゑ翠簾のかゝるゆゑ　泥
渋義の場法ハふしゆゑ人さられ　人
うつくしゆゑ月勝ゆゑ賤りて　菊
里をきき花の木陰子足数焼　五
くゝふ故蝶の編笠子入　菊

苔翠亭
月かハ此燈けさむ生しまれ　越人

物々うし 源楽 垣の板 苔翠
此君と名をいふ井の家蔵を 菊
中川に伝名のいろは翠ひ手 友五
南のゝ都ゝ南をかけたるもし 夕菊
よもきをのそく山の学のう 兆芹
ウ 打くさく煙のかけのかけしくて 徐々
女房もゝ絶ゝ当をまゝもし 人
聾と物のうすの意の友 名
痞抱さえて詩のつきを 流 菊
まさ止ぬ雲の戸ゆゑ怕とさま 翠
さし跡しるゝ此葉の章 菊
秋風や子を持ぬ者の者より 人

舎の庵は あるくしき月 徐
行 夏 行 おら 絶て一羽 跡 ゝ 菊
沖 子 和尺 る 敷 寒 の 塚 芹
唐人の語ゆゑ 花の蔵の 全 菊
磯 ゝ 生 よう 蔵 る 書 風 菊

涼川の親

夏 ゝ ゝ も 都 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 越人
酒 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 菊
蔵 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
理 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 人
鄭 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

風ゝ吹ゝ候て帰る市人　翁
何ゝのも長安ハこれ名利の地
醫のおもひをすゝめくる浮かれ　人
いそうしと沙先の穴をむさ　翁
ひとり世はやく寺の話より　人
此里ゝ古ゝ宣蕃のかんを傳へ　翁
足袋ゝのせぬ雨の河けあの　人
きぬしやゝすゝかなそくゝやゝ　翁
風ひゝのふ春ゝ此美し　人
まもつのす屋の御猪もすゝ蒸ぬ　翁
袖殘くさ紀舟後なりけり　人
月とむ此良の雪根を小にして　翁

ゝ雀囀るよくの机税　人
二 破れ戸の釘ゝ付る書の末　ゝ
尺安ハさひしき麦の挽割　翁
匣なくて服紗千つむ十寸鏡　人
袖さひ居る袖子のものいひ　翁
人去ていまゝ清雪の匂ひける　人
紛激ゝ籠る雪ゝ此隔　翁
時ゝ嵐のゝるゝ最中に　人
垣鶴のさゝけ雪ハこ浮ゝ候て　翁
あやまくに姉ゝ妹ゝ夕ゝのぬ　人
河の雲ハ逢流ゝむそ　翁
ゆく月のうゝの雪まで消さゝる　人

砧も老く鶴千居候り　翁
秋の田を荷をぬるゝ此長引て　人
さ以しあるのゝ文字写す来る　翁
いの見しく瓦庭の木葉屋　人
鶴老するゝの疲てかゝるゝ　翁
花の陰俗義まゐりもとゝ和まし　人
田あしを咲て解ゝ口　翁

大通庵芝多追善

手かゝちゝ大ゝや桔木の枝の長　翁
手多来て帰りまし垣の池　名翁
簑作りみの作りまま雨止て　苔翠

風のききりに如くす物の音　友五
内洞のくほのあるより洩る月　素堂
油学をのけるまの紙葉〻　活通
包めともやうし冷るゝ物くひて　雪良
手をおもはぬ家事ことも　堂
夫ハ来て鶴の森をもるまゝ　五
あらうつゝしき念佛ゆゆる　嬰
いのそと央のこふく鶴の御和　通
隣を起す堂のあけ方の　翁
義の月風候しひ千穀をそく　良
地子稲妻此稲を蔚しらん　翁
拾ちれぬ金の章あのゝ秋の来て　堂

世理をこそみをすけ　ゆの坊　良
嘆の紙　君の岩屋をつくらふめ　通
此ゆる小船を汲人谷川　玉
二　君を身の隠居と朱さはハ永し　翠
良の浜くろをくやむ乙ゆる　通
葉衣をむかしく長む笠の内　翁
猿ハ木末此松ゆさを　玉
苔生し佛の膝を枕しさ　良
笠とおもひて覚ゆる　菊
振袖ゆいりまてなむ月に新　通
無しくぬすむ葉の一株　翠
高浜の貴宮の僧の戸をゆく　翁

身の寿代をこそ弥しゆく　玉
泣顔をうつす鳥のこまれ　菊
奈良平も恥ぬ伝ゆるらん　良
二　酒を名ゆ付てハ人ゆ悟　翠
蒸をも黒ぬ庭の砂ひ　通
こみゆくる浜堂の新時なのかし　玉
故ゆせしらしくかふる笈摺　翁
清き地ゆ骨を納るものゆけ　良
青葉くゆく香の一時　菊

雲の鶴ハ竹下の作ゆ季遠よ　路通

花見をとらん梅み早咲　宗波
歩渡りお面し酒の食千了　友五
都ゆしはくす旅立の空　菊
特いさる私の条縁了斜了月　然水
火を焚鬼をさし次く秋　曽良
ウ　てらしと様わ虫の声了俗了　文菊
鉛白千もてひきうし珠数の練　水
生絶付尺みくき人のうゝ和ます　良
記そうろゝ示とゆりらう　通
去のさわき笄もこきぬ旅涸物　波
蔓のほうそとあられ砂嵐　五
不二消わひゐたるうをそ秋　菊

母の佛し我後千堀川のう　水
在柄千白結の桶を屏並く　五
濁りをまきす砂川の氷　菊
我もすらう涛千ね八百をつくみて　通
彼られ扇の骨を清うらん　五
二　秘秋そやさ蜂子ぬけしきし　菊
孫をつひきみくむ咲まの　菊
きんと子娘の形を美しき　水
いやしむ家千精了文塚　通
為家る塔のみ黄れる縁掛て　五
うそまち千白髪おろきむ　水
荊須千つゝあくまで糖の稲　良

菊
菊
五
通
菊
良
通
五
水
菊
菊

力もちすゝ為ゝ一儀　翁
放されて和りこむ牛の多源に　玉
法のえ千隆る旅の稲妻　水
西行の像をおまする浦の月　波
絵の絵にむ碑の絵の春　洞
義生を杉本の花に植そへて　良
青の遊ひ千母衣のごとくなん　通
二館宮に妻をわくる矢瀬の里　涼
然火禁拝て笹かくるし　竹
将の西に罷とやあらん妻あし　玉
丸輪ハ落て青石の塔　良
一か叶の相うこく浮と吹　嵐　秀

むくろさうしを弥すり月　竹
秋寒くゆく能と拾ふ法のから　菊
疲る気をさ浮る雰けさ　綠
とくぬ取千絵さし入る故怯の内　翁
極ゝ小鳥もあまけ志まふん　通
雲ゆゝに剥る僧を海と鷲　良
生木を極て阿ゝる名のは　水
二かゝしハ稲ゝ名をもる姉高　竹
悴四子人なえて若しき　翁
菅笠も衣千尺ゆる延然笹　通
峰千ハ猿に小猿手を引　綠
優婆塞もむる心やうこく絶　玉

麻の羽折手清しむ山吹　菊

当ねめ二尺の七五三を手の当　菊
藤竹うゑふ媒掃の浦　盛水
鰯うる俵の小口翁そゑて　曽良
村の地取手おくす鍬形　蕉竹
鍬歳湯の湧むる峰の月　宗波
紫を雲松の方に横たふ　詠通
ウ雲一直ぬ雲盤の里の菊買手　友五
立ちひたる安根の魂ゆみ　泥芹
三味線を焼てとりあつしと　菊

清くして鳴る榻の秋むしろ　菊
茶ひとつの情を興ふ清士の妻　通
稲荷まゐりに榻うし庵　良
釣月の柱手うたる作の面　水
学とや僧の艶錄鬼よむ都　波
侍の為をうくよとや秋の蝶　菊
笈のうちすも曽ハ尺しかり　通
羊稀の笹蔵埋む花の坂　五
清香清くむすきさ泥の雲　菊
二蛙鳴り盃のわかりに舟よせて　竹
砌をわとく鶴のけ為のさ　菊
数そ花ハ玉なりしお清ゲのる　波

雨ハさかり江茄子ちひさお　菊
男ゑ紀妹ハすこれをなくなて　通
涙火桶干鼻誠をなす　菊
老ぬ能ハ針のうしすの皆けるる　五
子ゑかう繪はたへうしきゑや　水
蛛の家ニ菜碗二ハ手を宜ば　通
ぬすみするさく掟さたし　良
甲斐信濃身をゆらそふ湯浅　波
宮さへされて此なる初鮭　五

家も宮よ梅よりおくの蕨　桂　雅良

菓の湯干殊る　堂はひよる　菊
きりしのすのおもひもす　桜うれ　菊
春のうちやく筆すれば　掠丸

笠まや家ゑさます一すみ　閑指
二人していさ大なる　瓜　其角
裁物の麻のきれ端悦ひて　菊

志すくしてこそ尺をもちや孫徳の田積雲　巳百
笠ゆらゆめんに彼の五月雨　翁

花のうけかゝるさみのもとゝ詠らしや　蕉雨
打ちや掃んと庵の帚木　蕉杖
七夕の八ゝまで物のさびしくて　蕉

林鐘十七日

何事ぞまでも我花時の月新深し　寸木
ゆゑ和似しく三段の夜　翁
海老嗜ひ鮮しくるものを回て　蕉雨

志ほし見ぬ時の夏ゝ未し　越人
猿をゆけてうけたる山さくら　蕉桂
柴くるひゆく探牛の雨　秋芽

尺をもちやれ花のをちきる杵の烟　悦然
手柴をかさしきしらんなるゝ　翁

賀新宮

能なるや雀よりこふ宵戸の葉　翁
蒜子尺ゆる熱い菊萱　知足
投ましくも咀の猫鳩の方こそ　安信